

## 児童の遊びの能力と言語的主張性が対処行動に与える影響

橋村 茜・幸田 るみ子

キーワード：遊び能力, 言語的主張性, 対処行動, 児童

**抄録：**先行研究で、遊びの能力が高く言語的な主張性も高い児童は対処行動レベルが高いということと、遊びの能力が低く言語的主張性も低い児童の対処行動レベルは低いということが言われている。本研究は、この遊びの能力と言語的な主張性が解離している児童の対処行動について検討した。対象は小学4年生から6年生の246名で、無記名式質問紙法とバウムテスト描画法を集団で施行した。質問紙法には集団遊び能力尺度、積極的・主張的関わりスキル尺度、言語的攻撃尺度、MMPI冊子式B型質問紙L尺度を使用した。分析の結果、遊びの能力が高く言語的主張性も高い児童は対処行動レベルが高く、遊びの能力が低く言語的主張性も低い児童は対処行動レベルが低かった。また、遊びの能力が低く言語的主張性が高い児童よりも、遊びの能力が高く言語的主張性が低い児童の方が、対処行動レベルが高かった。

年齢の経過と共に対処行動も発達していくとは言い切れず、年齢の差よりも男女の差が対処行動レベルに影響を与えていることが推察された。加えて、本研究の対象とした小学生においては、言語的に主張できることよりも、遊びの能力が高いことの方が対処行動レベルに対して重要な影響を与えることが示唆された。

### 1. 問題

乳幼児期・児童期の子どもの、遊びの有用性については、多くの研究がある。それは、遊ぶという体験の中で仲間関係を築き、社会性を身につけることができ、感情をコントロールする力を身につけたり、他人への共感性を育てることが可能だからである。

遠藤ら(2007)が行った今日の遊びについての実態と、遊びが心身に与える影響の研究では、集団で遊ぶことが社会性につながるということが明らかになっている。さらにこれまでの研究で、遊びの経験が少ない子どもは、遊びの経験が豊富な子どもに比べ、耐性不足やストレスに対するコーピングの不適切さが現れるとされている。また、遊びの経験が少ないと“自分の感情をコントロールできずにすぐ怒りを表出したり、友達と一緒に物事を行うことができなかつたり”という報告もある(遠藤ら, 2007)。

無藤(2006)によれば、遊びの中でも特にルールのある遊びが情動統制と密接に関連していることを報告している。

大竹ら(2002)の行った小学生の攻撃性の研究では、攻撃性の中でも主張性に関連する特性(言語的攻撃)は、ストレス状況下において問題解決や気分転換を図るコーピングと関係があ

ることを明らかにしている。また、攻撃を含む言語的主張性が高いほど適切にコーピングを用いるという報告 (Gulay, 2011; Bierman, 2005) や、さらに言語的主張性には性差があるという報告がある (Gulay, 2011)。

以上のことから、遊びの能力が高く、言語的主張性も高い児童は対処行動レベルが高く、また、遊びの能力が低く、言語的主張性が低い児童は対処行動レベルが低い、ということが推察される。しかし、遊びの能力と言語的主張性の間が解離している児童の対処行動について検討した研究はほとんどない。

## 2. 目的

本研究ではまず、先行研究で言われている遊びの能力が高く、言語的な主張性も高い児童は対処行動レベルが高く、また、遊びの能力が低く、言語的主張性が低い児童は対処行動レベルが低いことについて再検討を行った。その上で、遊びの能力と言語的主張性の間が解離している児童、つまり遊びの能力が低く言語的主張性が高い児童、また遊びの能力が高く言語的主張性が低い児童の対処行動について検討することを目的とした。

児童における遊びの有用性・必要性とその影響を考え、児童においては、言語的な主張性よりも遊びの能力が高い方が適応的な対処行動につながるものと仮定し、以下の仮説を立てて検証した。

### 仮説

- ①遊びの能力が高く、言語的な主張性が高い児童は、対処行動のレベルが高い。
- ②遊びの能力が低く、言語的な主張性が高い児童は、対象行動のレベルが低い。
- ③遊びの能力が高く、言語的な主張性が低い児童は、対処行動のレベルが高い。

## 3. 対象と方法

### 1) 対象

公立A小学校に通う4年生から6年生の246名。

### 2) 調査時期

2010年9月～2011年7月

### 3) 手続き

公立A小学校4年生から6年生に無記名式質問紙法とバウムテスト描画法を集団で施行。各担任教諭へ調査紙2種の施行を依頼し、実施方法については調査者より直接各担任教諭へ説明を行った。各担任教諭がクラス単位で調査紙の配布・回収を行い、それを調査者が回収した。

### 4) 調査項目

今泉・宮崎 (2009) によって用いられた児童の遊び能力をはかる尺度として集団遊び能力尺度6項目を採用した。今泉・宮崎 (2009) によって用いられた社会的スキル尺度の中の積極的・主張的関わりスキル尺度7項目を、対処行動レベルを測るものとして採用した。さらに、坂井 (2000) の小学生用攻撃性質問紙 (HAQC) の中から、攻撃性の中でも比較的良いコーピングと

関連がある(大竹ら, 2002)ことが明らかになった言語的攻撃尺度5項目を, 言語的な主張性をはかる尺度として採用した。これら18項目に加えて, 質問紙調査の信頼性を上げるため, MMPI 冊子式B型質問紙のL尺度から3項目を採用した計21項目で質問紙を構成し, 4件法で評定した。

質問項目1, 3, 5, 17について, 調査者により小学生向けに表現を変えている。そのため, 再度因子分析を行った上で, 仮説を検討することとした。

以上の質問紙に加えてバウムテスト描画法を行った。バウムテスト描画法は, 質問紙における対処行動を補助するものとして使用し, 教示を「実のなる木を一本, 根っまで書いてください」とした。本来は, 児童の場合は根を描かないことが多く, 根を描いているということは心理的に不安定感があり, 支持を求めていると解釈されることが多い。だが, 本調査では, “根を描くことが従来考えられていたよりも個人について肯定的で有益な情報が得られ, 樹木部分に反映されないものを投影される”(中園, 1996)ということから上記教示を行っている。

#### 5) 同意とプライバシー

調査を行うにあたり, 公立A小学校校長へ文書を元に説明し, 同意を得た。各担任教諭へは, 調査者より口頭で調査手順について直接説明を行い, 同意を得た。対象児童へは説明書を用意し, 当日各担任教諭が読み上げて説明を行い, 質問紙の提出をもって同意を得たものとした。

#### 6) 分析方法

分析はIBM SPSS Statistics 19を用いた。

### 4. 質問紙の結果

未記入や誤記入を除いた186名(男児95名, 女児91名:有効回答率76%)を分析の対象とした。

#### 1) 尺度の分析

まず, 全尺度18項目の平均値, 標準偏差を算出した。そして天井効果の見られた8項目を以降の分析から除外した。

次に残りの10項目に対して主因子法による因子分析を行った。本研究においては, 3因子構造を採用した。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子相関をTable 1に示す。なお, 回転前の3因子で10項目の全分散を説明する累積寄与率は63.74%であった。

第1因子は4項目で構成されており, 周りの人に対する言語的な主張に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「言語的主張性」尺度と命名した。第2因子は3項目で構成されており, 遊ぶという空間においてどのような行動をとるかという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「遊び能力」尺度と命名した。第3因子は3項目で構成されており, ある状況下におかれた時の対処方法についての項目が高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「対処行動」尺度と命名した。

Table 1 尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

項目番号	項目内容	I	II	III
9	相手と意見が違ってでも自分の意見を言う	.85	.04	-.10
16	友達の考えに賛成できない時ははっきり言う	.63	-.04	.10
17	邪魔をする人がいたら意見を言う	.61	-.02	.05
14	友達と考えが合わない時自分の考えを通そうとする	.46	.04	.04
1	遊びのルールの話し合いですすんで意見を言う	-.06	.84	-.02
2	遊び方などを決めるリーダーになる	.07	.82	-.08
3	遊びをよりみんなが楽しくなるように工夫する	.06	.40	.30
7	友達がよくないことをしたら注意する	-.01	-.10	.79
8	友達が迷惑なことをした時、やめるよう言う	.03	-.03	.66
6	遊んでいる時めんどごとが起きたら自分が解決することができる	.05	.17	.53
	因子相関	I	II	III
	I	—	.67	.64
	II		—	.56
	III			—

## 2) 尺度間の関連

各尺度に相当する項目の平均値を算出し、「言語的主張性」尺度得点 (平均10.87, *SD* 2.85), 「遊び能力」尺度得点 (平均7.65, *SD* 2.26), 「対処行動」尺度得点 (平均8.65, *SD* 2.05) とした。内的整合性を検討するために  $\alpha$  係数を算出したところ, 「言語的主張性」で.75, 「遊び能力」で.77, 「対処行動」で.72と十分な値が得られた。

3つの尺度は互いに有意な正の相関を示した。

## 3) 遊び能力, 及び言語的主張性の高低が対処行動レベルに与える影響

遊び能力高低と言語的主張性高低のクロス集計を行った。結果を Table2 に示す。

Table 2 遊び能力高低と言語的主張性高低のクロス表

		遊び能力高低		
		低群	高群	合計
言語的主張性高低	低群	52	24	76
	高群	30	80	110
合計		82	104	186

仮説を検討するために, 4群間の対処行動における分散分析を行った結果, 等分散性の有意確率は.918であり, 等分散が確認された。分散分析の結果,  $F(1, 3) = 27.00, P < .001$  となり, 主効果がみられた。

次に, 群間の比較を行うために多重比較 (Tukey HSD 法) を行った。その結果を Table3 に示す。

Table 3 4 群間における多重比較 (Tukey HSD 法) の結果

		平均値の差 (I-J)	有意確率
遊高言語低	遊低言語低	1.95513**	.000
	遊低言語高	.38333	.847
遊高言語高	遊低言語低	2.73846**	.000
	遊低言語高	.78333	.207
遊低言語高	遊低言語低	1.16667**	.009
	遊低言語高	1.57179**	.001

\*\* $P < .01$

遊び能力高言語的主張性高群と遊び能力高言語的主張性低群においては対処行動の得点に有意な差がみられなかった ( $P = .207$ ) が、遊び能力高言語的主張性高群と遊び能力低言語的主張性低群の対処行動の得点に有意な差 ( $P = .000$ ) があり、また遊び能力高言語的主張性高群と遊び能力低言語的主張性高群においても有意な差 ( $P = .009$ ) がみられた。従って、遊びの能力が高く、言語的な主張性が高い児童は、対処行動のレベルが高いと言え、仮説①は支持された。

遊び能力低言語的主張性高群と遊び能力高言語的主張性高群の対処行動の得点に有意な差 ( $P = .009$ ) があった。従って、遊びの能力が低く、言語的な主張性が高い児童は、対象行動のレベルが低いと言え、仮説②が支持された。

遊び能力高言語的主張性低群と遊び能力低言語的主張性低群の対処行動の得点に有意な差 ( $P = .000$ ) があった。従って、遊びの能力が高く、言語的な主張性が低い児童は、対処行動のレベルが高いと言え、仮説③が支持された。

#### 4) 学年によって対処行動レベルに差があるかの検討

学年によって対処行動レベルに差があるかの検討を行うため、学年における分散分析を行った。結果、等分散性の有意確率は .133 であり、等分散が確認された。分散分析の結果、 $F(1, 2) = 2.958$ ,  $P < .1$  となり、主効果はみられなかった。

#### 5) 性別によって対処行動レベルに差があるかの検討

性別によって、対処行動レベルに差があるかの検討を行うため、t検定を行った。結果、有意な差がみられた ( $t = 4.243$ ,  $df = 170.808$ ,  $p < .001$ )。よって、性別によって対処行動レベルに差があり、男児よりも女児の方が、対処行動は有意に高いと言える。

#### 6) 学年と性別が、対処行動レベルに与える影響において相互作用があるかの検討

学年と性別が、対処行動レベルにおいて相互作用があるかの検討を行った。等分散性の有意確率は .015 であり、等分散は確認されなかった。また、分散分析の結果、 $F(2, 180) = .73$ , n.s. で、相互作用は有意ではなかった。

### 5. バウムテスト描画法の結果

バウムテスト描画法は、杉浦 (2002) のバウム分析表を用いて、心理学を専攻する大学院生 2 名と教員 1 名で評価し、その出現率や傾向を群ごとに分析した。

### 1) 全体分析及び群間の比較

全体の出現度数及び出現率、各群の出現度数及び出現率を算定した。結果、全体の出現率の50%以上を超えているものは、「Ⅰ. 全体所見 1. 左寄り」が124 (66.7%)、「Ⅱ. 幹 3. 表面(樹皮)線」が94 (50.5%)、「Ⅲ. 枝 1. 伸び方 上向」が125 (67.2%)、「Ⅵ. 根 1. 先端処理閉鎖」が100 (53.8%)、「Ⅵ. 根 2. その他根の強調」が178 (96.2%)であった。

全体の出現率で50%をこえた上記5項目に関して、群ごとに差があるかの比較を $\chi^2$ 検定を用いて行ったが、有意な差はみられなかった。

次に、群内で50%以上が認められた「Ⅱ. 幹 5. ふくらみ・平行 平行」, 「Ⅱ. 幹 6. 上端開放」, 「Ⅴ. 実・花・葉 1. 実・葉 少ない」の3項目に関して、群ごとに差があるかの比較を $\chi^2$ 検定を用いて行った。「Ⅱ. 幹 5. ふくらみ・平行 平行」のみ、群間における有意な差がみられた ( $\chi^2 = 7.31$ ,  $df = 3$ ,  $p < .01$ )。

以上の結果から、5項目に、群間における差はみられず、群間で差がみられたのは郡内で50%以上であった「Ⅱ. 幹 5. ふくらみ・平行 平行」の項目のみであった。その出現率は、遊び能力高言語的主張性高群 < 遊び能力低言語的主張性高群 < 遊び能力低言語的主張性低群 < 遊び能力高言語的主張性低群であり、群間に有意な差があることが分かった。

### 2) 学年間における比較

全体の出現度数及び出現率、学年ごとの出現度数及び出現率を算定した。

全体の出現率で50%をこえた5項目に関して、学年ごとに差があるかの比較を $\chi^2$ 検定を用いて行った結果、「Ⅱ. 幹 3. 表面(樹皮)線」のみ、学年間における有意な差が見られた ( $\chi^2 = 17.41$ ,  $df = 2$ ,  $p < .01$ )。このことから、4年生よりも5年生の方が、5年生よりも6年生の方が「Ⅱ. 幹 3. 表面(樹皮)線」の出現率は有意に高いと言える。

次に、群内で50%以上が認められた「Ⅱ. 幹 6. 上端 開放」に関して学年ごとに差があるかの比較を、 $\chi^2$ 検定を用いて行った。結果、「Ⅱ. 幹 6. 上端 開放」では、学年における有意な差が見られた ( $\chi^2 = 11.57$ ,  $df = 2$ ,  $p < .01$ )。このことから、4年生よりも6年生の方が、6年生よりも5年生の方が「Ⅱ. 幹 6. 上端 開放」の出現率は有意に高いと言える。

以上の結果から、学年で差がみられたのは「Ⅱ. 幹 3. 表面(樹皮)線」のみであり、その出現率は4年生、5年生、6年生の順で高くなり、学年ごとに有意な差があることが分かった。また、郡内で50%以上であった「Ⅱ. 幹 6. 上端 開放」の項目でも有意な差が認められた。その出現率は4年、6年、5年の順で高くなり、学年ごとに有意な差があることが分かった。

### 3) 男女の比較

まず、男女の出現度数及び出現率を算定した。全体の出現率で50%をこえた5項目に関して、男女に差があるかの比較を $\chi^2$ 検定を用いて行った。

結果、「Ⅵ. 根 1. 先端処理 閉鎖」では、男女における有意な差がみられた ( $\chi^2 = 17.15$ ,  $df = 1$ ,  $p < .01$ )。この結果から、その出現率は、男児よりも女児の方が有意に高いと言える。「Ⅵ. 根 2. その他根の強調」では、男女における有意な差がみられた ( $\chi^2 = 7.04$ ,  $df = 1$ ,  $p < .01$ )。この結果から、その出現率は、男児よりも女児の方が有意に高いと言える。男女内で



50%以上をこえた項目はなかった。

以上の結果から、全体の傾向として挙げられた「Ⅰ. 全体所見 1. 左寄り」, 「Ⅱ. 幹 3. 表面(樹皮)線」, 「Ⅲ. 枝 1. 伸び方 上向」では有意な差がなかったが, 「Ⅵ. 根 1. 先端処理 閉鎖」と「Ⅵ. 根 2. その他 根の強調」では有意な差があり, 男児よりも女児の方がその出現率が高いと言える。

## 6. 考察

### 1) 質問紙結果の考察

質問紙の結果から、遊びの能力が高く、言語的な主張性が高い児童は、対処行動のレベルが高いと言え仮説①が支持された。大竹ら(2002)が小学4年生～6年生を対象に行った研究で、言語的に主張ができる児童は問題解決や気分転換を図れるという報告があり、本研究の言語的な主張性の高い児童は対処行動レベルが高いという結果に一致する。また、遊びの能力が低く、言語的な主張性が高い児童は対処行動のレベルが低いと言えた。さらに、遊びの能力が高く、言語的な主張性が低い児童は、対処行動のレベルが高いと言えた。このことから、児童においては遊びの能力の高さが、対処行動レベルの高さに関連していると言えるだろう。

遊び能力高言語的主張性高群と遊び能力高言語的主張性低群に、有意な差が見られなかった点に関しては、今回対象とした小学校4年生～6年生においては、言語的に主張できる能力よりも、遊びの能力のレベルの方が対処行動に対して影響を与え、遊ぶということの重要性がこの年齢の児童にとって言語的に主張できるということよりも重要であると解釈できるだろう。

遊ぶ能力、特に集団で遊ぶ能力は、遊びのイメージやルールを共有していくことが必要になる。コミュニケーション能力や社会性が育っていなければ、複数子どもたちで遊ぶことは難しくなる(倉持, 2009)。さらに、年齢と共に遊びの中でも言語での関わりが増加傾向にあることを考えると、対処行動レベルへの影響面だけでなく、言語発達の面からみても、やはり遊びの場の減少、遊ぶ機会の減少、中でも集団で遊ぶ機会の少なさや減少といったことが、問題であると考えられる。

学年間の対処行動の差には、主効果はみられず、学年間での差はないという結果となった。男女間の差に関しては、有意な差がみられ、男児よりも女児の方が対処行動は有意に高かった。児童期においては、自己制御や道徳判断がより確かになると同時に、9歳以降は特に性差が顕著になり、女児の方が、社会的な規範の意識が強く、誘惑への抵抗が強いことが示されている(松田, 2001)。これに加え、女児が男児よりもより他者との言語的な関係に従事する傾向を踏まえると、男女において対処行動レベルに有意な差があり、女児の方が高いという結果は先行研究と一致していると言えるだろう。

以上のことから、今回対象とした小学校4年生から～6年生の児童においては、言語的な主張性よりも遊びの能力の方が、また年齢よりも男女による発達の違いが対処行動レベルへ影響を与えているという結果となった。

## 2) バウムテスト描画法結果の考察

全体の傾向として、内向的、受動的、消極性の傾向があるが、活動的で、精神的なエネルギーの流れは目標に向かって流れていると言える。

また、樹皮の線の出現率とその解釈からは、自我の統合の低さがうかがえる。しかし、その出現率が、学年が上がるにつれ有意に高くなるという結果も踏まえると、対象者の年齢が発達の途中段階である為、感情の細分化がなされていく過程であるとも解釈できる。

バウムテスト描画法実施の際、教示を「実のなる木を一本、根っこまで書いてください。」とした為、「Ⅵ. 根 2. その他 根の強調」の出現率が高くなったものと考えられる。そこで、根が描かれているかどうかではなく、どのように描かれているかという点に着目して検討すると、根の強調及び根の先端閉鎖の出現率が、男児よりも女児の方が高かったことから、男児よりも女児の方がエネルギーを取り込もうとする様子がうかがえる。しかし十分にはエネルギーを取り込めていない状態であると解釈できる。

## 7. 総合考察

各群のバウムテスト描画法の特徴を踏まえた上で、各群より典型的なバウムテストを選抜し (fig. 1 ~ 4)、質問紙の得点も考慮した上で解釈を行った。

4群を比較すると、遊びの能力が低いと攻撃性や衝動性の高さがうかがえ、遊びの能力が高いと外界への積極性や社交性の高さがうかがえ、衝動性や攻撃性を理性により統制しようとする傾向があると解釈できる。さらに、言語的主張性が低いと衝動性が高く、言語的主張性が高いと自分の衝動性や攻撃性に気づくことができる傾向がうかがえた。

また、質問紙においては年齢が上がると共に対処行動も発達していくと単純には言えないという結果が出たが、選抜した4群の樹木を見ても、遊び能力低言語的主張性低群と遊び能力高言語的主張性高群の学年が同じであり、同様のことが言えると考えられた。

バウムテスト描画法結果の「Ⅱ. 幹 3. 表面 (樹皮) 線」は学年が上がるにつれてその出現率が有意に高くなっているため、「Ⅱ. 幹 3. 表面 (樹皮) 線」を感情の細分化がされてきた過程であると捉えるならば、児童において、対処行動の発達はずしも年齢の発達と比例しているわけではないが、感情の細分化といった情緒面の発達は年齢に比例して高くなる、と言えるだろう。

また、遊びの能力が高いと外界への積極性や社交性が高いというバウムテスト描画法の結果が、質問紙において言語的主張性よりも遊び能力が高い方が対処行動のレベルが高い、という結果と結びついたものと考えられる。

最後に、質問紙では今回遊び能力の尺度として集団遊び能力尺度、言語的主張性を測る尺度として言語的攻撃尺度を採用したが、児童においては発達と共に遊びが協同的に変化していくことや、遊びの変化の中で集団を通じ、言語が発達していくことを考えると、この2つの尺度は近い概念を測っている尺度であると思われる。本研究において因子分析を行った結果、先行研究とは異なった結果となったことも考えると、尺度の構成概念の妥当性を再検討する必要がある。



fig.1 遊び能力低言語的主張性低群

学年4年生, 男児  
樹冠と幹のバランスが悪く, 枝が幹から生えている。電柱のような幹で幼い。

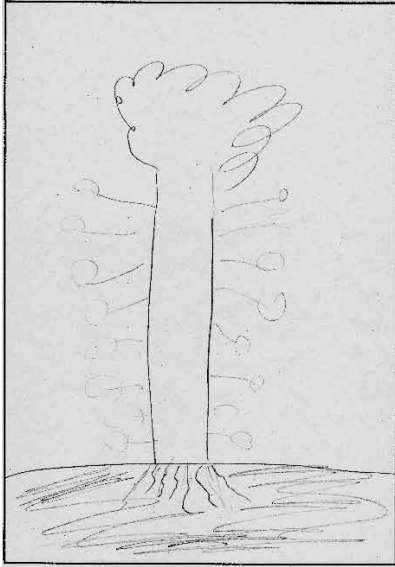


fig.3 遊び能力高言語的主張性低群

学年6年生, 女児  
枝や実が描かれているものの, 樹冠が塗られており, 実が落ちている。

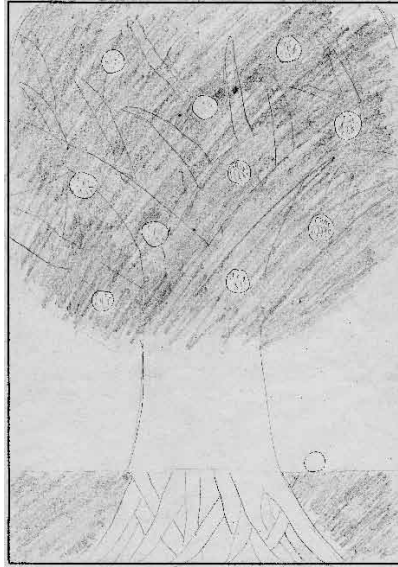


fig.2 遊び能力低言語的主張性高群

学年6年生, 男児  
ある程度の推敲はされているが, 枝が幹から生えており, 樹皮が多く描かれている。

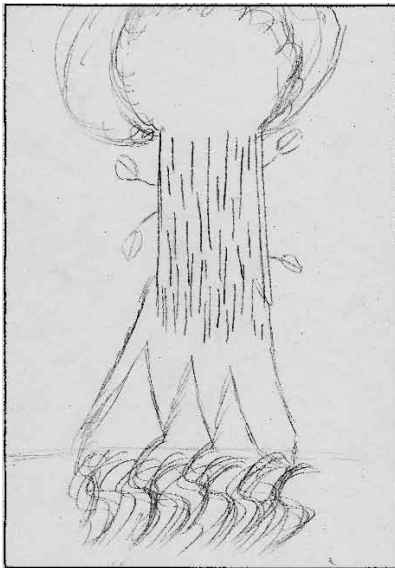
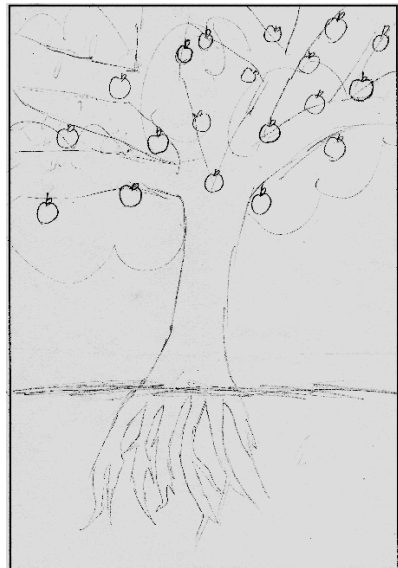


fig.4 遊び能力高言語的主張性高群

学年4年生, 女児  
樹冠と幹のバランスが良く, 枝が広がりたくさんの実が描かれている。



あると思われる。

さらに、本調査では対象者が少なく、1地域の1学校での調査であった為、今回の結果が一般的な小学4年生～6年生に当てはまるとは限らない。今後対象者を増やし、他の地域、施設での調査・分析を行うことが必要であると考えている。

## 文献

- Bierman, K.L 2005 *Peer rejection: Developmental processes and intervention strategies* New York: Guilford.
- 遠藤俊郎・星山謙治・安田貢・斉藤由美 2007 遊びが児童の心身に与える影響について—児童の攻撃性・社会性に着目して— 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第12巻, 25-34.
- Hulya Gulay 2011 *Effects Of Peer Relationships And Gender On Turkish Children's Language Skills Social Behavior And Personality*, 39(7), 979-992.
- 今泉和子・宮崎圭子 2009 ひとり遊びにおける子どもへのポジティブな影響—テレビゲームをタイプ別に見て— 跡見学園女子大学文学部紀要 第42号 (1), A75-A91.
- 倉持清美 無藤隆・岡本祐子・大坪治彦 (編) 2009 やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる発達心理学 [第2版] IV 幼児期後半 7 群れて遊ぶ 株式会社ミネルヴァ書房, 88-89.
- 無藤隆 子安益生・二宮克美 (編) 2006 キーワードコレクション 発達心理学 [改訂版] III—29 遊び 株式会社新曜社 124-125.
- 松田惺 無藤隆・高橋恵子・田島信元 (編) 2001 発達心理学入門 I—乳児・幼児・児童 第13章自己・自我 財団法人東京大学出版会, 214-219.
- 中園正身 1996 一変法としての樹木画法の研究 根を強調した教示法の導入について 心理臨床学研究 第14巻 (2), 197-206.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子 2002 小学生におけるコーピングと攻撃性との関係 学校保健研究 第44巻 (2), 155-165.
- 坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子 2000 小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 学校保健研究 第42巻 (5), 423-433.
- 杉浦守邦 2002 ヘルス・カウンセリングの進め方3 東山書房, 26-53.